

見た目やデザインも気になる！

福祉用具は機能面・安全面が十分に担保されているということはもちろんです。最近ではデザイン性にもこだわったものが出てきています。カラーバリエーションが豊富なもの、スタイリッシュでカッコいいデザインのものなど少しずつですが増えてきています。

福祉用具の多くはそれが無いと生活することが難しい、とても不便だということ、使用される人は日常的に利用することになります。だからこそ、利用者自身が気に入るものであったり、使いたい、使い続けたいと愛着の持てるデザインであったりすることは、その人その人の個性を尊重する上でも大切な視点になると思います。

好きなデザインを選ぶ

杖を例にあげると、杖をつくことで歩行が安定すれば良いということのみを見ていけば、杖の色や柄はどうでもいいことかもしれません。しかし、日常的に使用するからこそ、花柄のデザインがあしらわれていた

り、和風テイストのデザインになっていたりと使用者の個性を表現できるものが沢山登場しており、日常生活の中の彩りの一つになってきています。

相談してカスタマイズ

また、福祉用具以外にも3Dプリンターを使用してオリジナルの自助具を作成してくれる事業所（NPO法人）もいる。三木市もあります。自助具として市販もされていますが、使用する人の状況は様々です。例えば、「柄の部分がもう少し長ければ（短ければ）使いやすいのに」と言った個別の悩みごとに対して、一律に作成された自助具を当てはめるのは難しいかもしれません。少しでもよりよく使用しようと思つて、工夫を凝らす素人判断で何かを取り付けたり、切り取ったりすることで、かえって危険になってしまう恐れもあります。できない・無理だということが常態化していくと、困っていることが当たり前前の状態となり、それが改善される・改善できるという発想にな

りづらいかもありません。「こうだったらいいのに」という思いや希望を抱いているうちに、作業療法士などの専門家に相談してみると良いでしょう。



オシャレも楽しみたい

さらに、日本福祉医療ファッション協会代表理事の平林景さんが手がけたブーツ。車いすユーザーの「足に麻痺があるとブーツが履きにくい」という声に応えてファスナーを複数つけて、バナナの皮のように広がり、履きやすくなったものです。これは自助具ではないですし、ブーツ自体履かなくても生活に支障はないかもしれない。しかし、オシャレを楽しみたいという気持ちは否定されるものではない。それに応えていくということも大切なことです。



そして何より、ファスナーがオシャレなデザインとなっているので、スタイリッシュでカッコいいブーツになります。ブーツの脱ぎ履きが面倒ではなく、ユニバーサルデザインの観点からも誰もが使いやすい、そしてそれらを使うことで自分らしく過ごすことができる、そういう人生の質を高めてくれるものだと思うと、一部の困っている人だけが使うものではないということが見えてくると思います。

(@KeiHirabayashiより引用)

在宅・地域での使い方 「予防」視点の広がり

これからの福祉用具は、「介護が必要になってから使うもの」ではなく、「元気で暮らし続けるために、早くから使うもの」へと広がっています。

小さな段差をなくすスロープや自動点灯ライト、歩行を安定させる歩行器などは、高齢の人のケガ予防はもちろん、障害のある人、子ども、けがをした人にも役立つ暮らしの安全を守る工夫です。

福祉用具があることで、高齢の人は、住み慣れた家で安心して暮らし続けることができますし、障害のある人は、より暮らしやすく、自分のやりたいことに挑戦しやすくなります。子どもは、学び・遊び・生活がしやすくなり、支えが必要な人を支える家族の負担も軽くなる、といった多くの良い変化が生まれます。

また、外出を助けてくれる用具や、まちのバリアフリー環境が整っていると、誰もが外へ出やすくなり、地域への参加の機会が広がります。さらに、福祉用具が上手に使われ、社会のバリアが減ると、「困っている人がいても自然に受け入れられる」心のバリアフリーにもつながります。

福祉用具は今、「介護のためだけの道具」ではなく、みんなが居心地よく、安心して暮らし、社会参加できる地域をつくるための大切な道具へと進化しています。

年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが自分らしく暮らせる社会を支えるパートナーです。

